

ヨーロッパと日本の公共空間、市民と共にある都市計画

お話を始めるにあたり、ある文章を引用したいと思います。出典はあるウィーンの雑誌で「公園と公共空間」というテーマの記事の冒頭の一文です。それにはこうあります：「都市の公共空間とは、社会的グループが意見を戦わせる場である。公開討論ができるということがその場所の属性である・・・」この文章によって著者はそれまでに広く了解されていた解釈を明文化しました。つまり、都市の公共性とは、広場や街路など外で行われる何かである、ということだと。ここで普遍的な真実のように聞こえることを、私は文化的・歴史的な文脈に落とし込んで考えなくてはならないと思っています。都市空間とは、おおよかに意見がぶつかり合う場所である、という主張は一見当たり前のように聞こえますが、それは何よりも都市の公共性についてのヨーロッパ的理想をパラダイムとしているのです。

ではその公共性についてのヨーロッパ的理想とは何か、と言う問いに対して、私はこの講演の後半で日本人の公共理解や日本における公共の現れ方についての私の観察を通して、より考察を深めたいと思います。その際、日本の公共理解についての私の観察やリサーチはもちろんのこと、ヨーロッパの公共空間についての観察さえ、まだ中間結果というべきもので、今後検証が必要であることを先に申し述べておきたいと思います。

ヨーロッパで公共空間と言えば、その都市化の歴史から見て、市の中心部のフリースペースのことをまず思います。都市が発達するにしたがい、都市的な中心が生まれました。様々な意味における中心です。単に多くの人々が都市の中の狭い空間にかたまっている、というだけにとどまりません。中心としてのヨーロッパの都市には、政治、経済、信仰、文化の力が集中しているのです。そのさまは、市の中心広場に見られます。ここに人々が、政治が、経済と宗教が、そして文化が集中しているのです。そこは屋根もなにもない空間で、

都市の道路網の中に設けられた開口部ともいえる場所です。この市場経済的な交流が行われる開かれた場所を取り囲むのは、教会であったり、宮殿または市役所、劇場や美術館などの文化施設であったりします。この描写は多少図式的であるかもしれませんが、ヨーロッパ的公共空間をよく反映していると思います。この空間が公的であるとされる理由は、それが共通の場所、公共体(Gemeinwesen)であると認められているからであり、地域住民や市民が集まってくる、あるいは人々を集めることができる場所だからです。

しかし市役所前の広場に市が立つというだけでは、まだそれは公共とは言えません。この点が私には決定的に重要だと思えます。単なるオープンな空間だけでは、それが都市の公共空間だとは言えないのです。都市空間が真に公共性を持つのは、人々がそこに集まること、そして彼らが**意志を通じ合わせる**ことに拠ってなのです。従って公共性とは市民の活動と**コミュニケーション**によって存在し始めるものだと言えます。これは広場がそれ自体ですでに公共であるとする考えとは全く異なります。しかし同時にまた、少なくともヨーロッパ人のイメージに従えば、誰もが行けるオープンな都市空間は公共の基盤に違いありません。そういう建築物がなくては公共も無いのです。この中央広場の絵図(写真?)は、都市とその発達が公共空間といかに密に結びついているかを明らかに示しています。都市空間はあたかもステージであり、そこに市民が登場することで公共性が見えるようになるのです。ですから市民は自分たちの舞台としての都市空間の形成に参加できるべきだし、参加できるようにしようとするのです。ですからヨーロッパでは多くの市民が「**町に対する権利**(Recht auf Stadt)」を口にし、都市計画プロセスへの参加を求めます。そして投資家の経済的関心によって都市計画に規制が増えていくことに対抗しようとする。

人々は、都市空間とは、単に広場が建てられたことによってできるわけではなく、それぞれの利益を追求する様々なグループの要求がせめぎ合う空間であるということを認識しています。私はこの点について日本の思想家である丸山真男氏の言葉を引用したいと思います。丸山氏が自由について書いていることは公共性にも当てはまるからです。

彼は次のように書いています。「自由とは装飾物ではない。自由とは真の実行によってのみ得られるのだ」と。同じことが公共空間にも言えます。「**公共空間とは建物ではない。それは真の実行によって生まれるのだ**」と。

こうして公共とはダイナミックな舞台にも等しく、そこでは公共の可視化の形態的、社会的な側面、美的側面やコミュニケーションからみた側面が束ねられているわけです。そしてこのことは芸術にとっても大きな意味を持ちます。芸術にとって公共空間は、たんに作品を展示する場所としてだけ関心の対象となっているわけではありません。公共そのものが芸術のひとつの重要な属性なのです。つまり、社会的な意見交換のステージとしての空間を生産すること、それを可能にし、実行し、**可視化すること**、行動し、コミュニケーションするものとしての芸術です。それ故公共性が欠かせない芸術は、可視化という手法や、アクション、パフォーマンス、シンボリックなインターアクション、インスタレーションによる舞台構築などの手段を用いて空間に介入し、それによってその空間が公共のものとなるのです。

1990年代からそのような芸術を「**公益のためのアート**」と言うようになりました。これまでの「**公共空間におけるアート**」という理解だけではなくてきたのです。

「公益のためのアート」は、彫刻やオブジェで都市空間を家具のようにしつらえるのではありません。このアートはむしろ公共のために行動を起こすのです。

「胚細胞」のスライド

これはドイツのハンブルクです。ここで私は同僚のハラルド・レムケと、私たちの住居がある地区の住民と共に、この公益のためのアートを実施しました。それは隣近所の人達で造るオープンな菜園です。この菜園が**ステージ**で、そこで全く単純で簡単な活動—つまり菜園造り—をすることで市民の存在が可視化されるのです。

つまり自分の家やベランダではなく、また田舎に菜園を持っていてもそれを土地の農家に任せっぱなしするのではなく、この都市の菜園で自ら野菜作りをすることで、私たちは自分の手で都市の公共空間を作り始めたのでした。

共同菜園では、少なくともその場に居合わせた人達がもちろん会話を交わし、他者との対話が行われる一つの基盤を形成します。つまり菜園がコミュニケーションのプラットフォームであり、都市的で民主的な公共空間なのです。

野菜作りをとおして地域住民が互いに言葉を交わし始めます。ドイツ語の慣用句に「花を通して言う (etwas durch die Blume sagen)」という表現があります。なにかをやんわりと指摘することを言いますが、この菜園の一件から見て、この慣用句も今後は「野菜を通して言う」に替えられそうです。つまり自分の意見を言うなら遠回りでもまずまちなかの共同菜園にデビューすることから始めなさい、という意味で。

ここでお話の冒頭に立ち戻り、再度批判的に問いを立てたいと思います。すなわち、このような公共の理解が何処でも通用するのだろうか？という問いです。公共なるものは常に都市のフリースペースを舞台として、そこに市民が登場し自分の思いをオープンに語ることで見えるようになるものなのか、と。

日本には、日本の都市建設の伝統から言っても、人々が集まるオープンな場所としてのフリースペースはもともと無いと言われます。ということは、日本人はもともとオープンな空間に居ることを好まなかったということです。つまりその場所は攻撃を受けても無防備であるからでしょう。また日本人はステージに上がって見られることもあまり好きでなく、むしろ人に見られたくないと思っているようです。したがって、見知らぬ他人とコミュニケーションすることなど、日本人には非常に難しい大それたことで、できればそれを回避したいと思っている、と。社会的なグループ間での討論などは礼儀上妥当ではなく、日本人の社会性全体の目標は和である、と。

この日本人と公共性についての一般的な証言は、ヨーロッパの場合同様、日本においても

まずは当然のこととして受け取られており、多くの人がそれを信じています。ですが、ヨーロッパの公共空間という理想も問い直してみる価値があったように、おそらく日本の状況もより正確に観察して検証することは意味があるでしょう。

そしてよくよく観察すれば、日本でも公共性はヨーロッパ人には予想も付かないところで一気に顕在化します。そして自己表明の勇気も、おそらく日本人でもまさかと思うほどに発揮されています。

まずとてもささやかな観察例を紹介します。

ピザパーティーと餅パーティー

観察したのは餅パーティーとピザパーティーです。これは京都市内のある路地に住むご家族が周囲に声をかけて行われました。このパーティーには、花見や大がかりな夏祭りに見られる集団的で誘導的な一般ルールはありません。集まりは自分たちで段取りし、決めました。その中で対立する意見が述べられるような大きな公共性はありませんが、アイデアの交換などが、おなじものを味わうなかで行われ、小さな公共空間が可視化された例です。

つまりこのようなパーティーは、公共性への小さなリハーサルともいえます。半分プライベートともいえますが、一応戸外で行われています。参加者は招待に応じてやってきており、脇を通行する他人の視線に曝されています。このようなパーティーは、或いは珍しい例なのかも知れません。しかしひょっとしたら、その珍しさは単に、今の日本にはこういう活動ができるような静かな路地のような場所がないからだ、ということかも知れません。まだ昔の町の構造が残っていて、民家の間に細い路地があるような所なら、このように住民が共同で空間を大いに利用しています。

隣近所のつきあいを可能にするために、このように共有できる戸外の場所を保存すること、またはそういう場所を新たに造ることが市民と都市プランナーの課題であるとも言えるでしょう。

玉手箱

都市空間におけるコミュニケーションの可能性についての小さな実験として考案したのがこの玉手箱です。これを私はヴィラ鴨川とそれを出た道路の間に設置しました。意見や考えのオープンな交換にステージや媒体 (Vehikel) が必要ならば、どのようにそのステージや媒体を日本とヨーロッパという異質な社会に、それぞれ異なる形で用意できるのかを考えてみればいいのです。

玉手箱の外観は日本では至る所で見られる自動販売機に似ています。しかしこの箱は自動販売機の経済的機能を超越して、アイデアや意見の交換を可能にしようという玉手箱なのです。

箱は誰でも利用でき、間接的に、見られることなくアイデアやモノを交換できます。もちろんこの玉手箱程度のものはまだまだ公共空間とは言えません。それは遊びであり、都市の空間にとっての公共性の一面をシミュレートする装置です。

これらの、フリースペースにおける行為やコミュニケーションのシンボリックな媒体などのささやかなレベルを離れ、真面目な世論形成の空間や、社会的事象への確固とした参加構造を探しはじめると、日本ではよく町に定着している隣人同士のコミッティー、すなわち町内会を紹介されます。

伏見町内会の会合

都市の大きな広場などの外部空間ではなく、町内会の中で、町民が自分たちに関係のあるテーマについて意見交換をしたり、決定したり行動したりする形で公共が形作られています。

ドイツの多くの都市でも、このような「我が町の協議会」、または「町内会」のようなものがあればいいのに、そうすれば政治や行政と住民との間の情報の流れがもっと密になって、公共の視野での意見形成プロセスを確立できるのに、という声が聴かれます。ドイツの各都市には、日本の町内会のような近隣住民のための制度化されたプラットフォームはほとんどありません。現代の都市デモクラシーにはこのような地域の公共という構造、どの一人の市民も含めた隅々までの参加(feingliedrige Teilhabe)が必要です。町内に様々な分野のエキスパートがいれば、その貴重な知識を我が町に活かすことができます。彼らの側でも、公共の利益に均衡する貢献をしたいという関心を持っているのです。

こうしてみると日本には、多くのヨーロッパ人が望む隣近所の人々の協議会(Rat)という構造が、都市的公共性の確立した一つの形態として魅力的に存在しているようです。ご覧戴いている写真には伏見区にある三つの町内会の会長さん達の会合が写っています。会長さん達は京都市のまち作りセンターの代表者達と共に、交通計画や健康面でのサービス、災害時の安全対策といったテーマや、夏祭りをどう組織するかについて意見交換をしています。

町内会は、聴いたところでは日本の村構造の長い伝統から発生したもので、日本人の互助精神が文化的背景にある(jap. Kultur der gegenseitigen Sorge und Hilfe)そうです。では町内会とは、その最良の意味で、自己組織化した助け合い文化や都市計画プロセスへの公的参加の表象なのでしょうか？

町内会は批判的世論の、そして市民の自己組織化のプラットフォームたり得るのでしょうか？

歴史的に見ると町内会は、都市的なものの組織化に参加したいとか、公に発言したい (öffentliche Verlautbarung) とかの意志を持つ熱心な市民が起爆力となって発生したのではありません。また、町内会は伝統的な村構造や助け合い文化一般とも関係がありません。町内会は、人類学者のカーチャ・シュミットポットのリサーチによれば、20世紀初頭に日本の大都市の行政府が、ゴミ処理や上下水道の整備、福利厚生などのインフラへの投資をせずに成長する都市の混沌状況を統治するために戦略的に設置したものです。それらの処理は住民自らが行うべし、とされたのです。その動機付けとして相互扶助文化という神話 (Mythos) が利用されたのです。

町内会は従って、地域住民達が自分たちの利益のために自ら組織して生まれたのではなく、地域エリートが私的利益の保持のために確立したのです。彼らは自ら町内会の会長となって、政治的影響力を持つようしました。

当初はこのエリートによる組織であった町内会がすべての住民に開かれたものになったのは、この民間組織が役目を果たすための財源を早急に必要とし、しかし市からはそのお金が出ないとなったときでした。会の構成員である一般住民から会費を徴収することで町内会の金庫は満たされたのです。つまり会員となる住民が多いほど会の収入も大きいのです。全員に開かれた会であることは、強制的に全員から会費を徴収するということでした。

助け合い文化という神話から解き放たれ、その歴史的発生において修正された町内会には何が残るのでしょうか？

その非公式なヒエラルキーが暴露され、本来市が担うべき役割を補完させられていることがあからさまになったら？

ともあれ、日本の都市には広域的に自己組織化された構造が存在し、それは住民によって習得され、世論形成と都市計画プロセスへの参加のプラットフォームとして機能する潜在力を持っています。構成員の住民に応じて、町内会は高齢化していたり、上下関係が顕著だったりしますが、また非常に熱心に取り組み、自ら組織化する力のある町内会もあります。

高野プレゼンテーションとその招待チラシ

最後にもう一つの例を報告したいと思います。これは参加者が本格的に市民社会的に取り組み、さらには公的空間において意見表明をするその勇気を記録したもので私を魅了しました。京都市左京区の高野では住宅地のまん中に大型パチンコ店が進出することになりました。多くの住人はこの計画にたいへん衝撃を受けました。彼らはパチンコ店が自分や子供達の生活に悪影響を及ぼすことを案じたのでした。このプライベートな理由から彼らは「パチンコ反対」の声を上げました。しかし住人の中には、ただ単に反対するだけでなく、自分たちの地域の将来について考え、**創造的に介入**したいという**建設的**な意欲も生まれました。そこで「高野の抗議する人々」は、地域のニーズを把握しようと住民にアンケートをおこないました。高野の人々はそれだけにとどまらず、パチンコ店の建設予定地に隣接する空き地で集会を行い、情報の共有機会を設けました。また世間の注目を集めるためにフェスティバルを開催し、自分たちの宣言書を読み上げました。

また建設計画に反対するために弁護士の協力を仰ぎ、最近ではドイツのアーティストや思想家からの協力も得ています。彼らは高野の人達にハンブルクでの活動、つまり公共のプラットフォームとしての共同菜園について説明しました。

このコミュニケーションのプラットフォームとしての菜園のアイデアを高野の人達は採用し、小さなプランターで菜園を始めました。まだ道路の端に置かれている程度ですが、この公共の菜園はパチンコ店進出反対の意思、また参加への意思をきちんと目に見える形にしたシンボルとして設置されています。

高野の菜園づくり、グループ写真

この例が私たちに示していることは二つあります：まず一つは、日本でもヨーロッパ同様に市民の自己決定的、自己組織的行動によって、都市計画やその他の社会領域に介入しようとする公共性は生まれるということです。

その形は、祭りの開催であったり、菜園作りであったり、或いは意見交換のための直接的・間接的な場 (Forum) づくりであったり様々です。

二つ目は、公共空間とは文化によって様々に異なる**実現空間** (Ermöglichungsräume) であるということです。つまり公園や大きな広場だけが公共空間なのではなく、伝統的な町に見られる小さな路地や町内会という屋内空間もまた、公共性を実現するということです。
